

2022年2月9日

申請者：太田浩之（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、SD161003）

論文題目：アダム・スミスの経験論的道德理論—「人間本性の抽象科学」と道德判断の諸原理—

論文審査委員

森村敏己

井頭昌彦

柘植尚則

1 本論文の概要

本論文は、『国富論』と並ぶアダム・スミスの主著『道德感情論』とは、道德判断が下される過程を、先験的な原理を排しながら徹底して経験と観察に依拠しながら具体的に記述し、解明するという方法を貫徹した作品であるとの観点から読み解くことで、スミスの道德哲学の特徴と構造を明らかにしようとした労作である。

2 本論文の成果と問題点

本論文の成果として強調すべきは以下の諸点である。

第一に、スミスの方法論とその成果について説得的な議論を提示したことが挙げられる。スミスが経験と観察を重視したとする見方自体は常識的なものだが、太田氏はそのことを出発点としながらも、こうした方法の徹底がスミスの理論にどのような特徴をもたらしたかを検討する。太田氏によれば、スミスはニュートンに代表される自然哲学の影響を受けながらも、経験と観察から単純で少数の、可能であれば単一の原理を導くことができるとする「仮定」が過度な単純化への誘惑という危険を伴うことを強く警戒し、経験と観察の重視という方法を通じてむしろ道德判断を司る原理の多様性を主張するに至ったとされる。ニュートンの自然哲学は当時、一見複雑に見える物質世界の運動が、引力という単一の原理によって説明できることを経験と観察から導き出した見事な成果だとされた。こうした評価の是非は別として、経験が示す多様なデータから帰納的に単一の原理を導出することが「真の」科学的方法として理想視される傾向があったことは否定できない。スミスも、人間には単純な少数の原理を求める性向が存在することは認めながらも、道德判断を単一原理に還元するこ

とを拒否し、彼自身が最も重視する共感に基づく判断に加え、慣習に基づく判断、一般的規則に基づく判断、効用に基づく判断という四つの判断様式を見出したとされる。こうした多様な原理の是認は経験と観察という方法の徹底がもたらしたものだが、さらに太田氏は、「反省」という要素とそれが介在することに起因する「判断に至るまでの時間」の違いという要因を用いて、これら四つの判断原理は単に併存しているのではなく、スミスが最も「自然的」とする共感に基づく判断を中心に秩序付けられているとして、スミスの理論がもつ多様性だけではなく、その体系性をも指摘し、ここにもスミスの方法論の成果を見出している。

第二は、道徳判断の原理と社会階層との関係をめぐる従来の通説に有効な反論を加えている点である。共感という、いわば感情に由来する原理に基盤を置く判断は民衆に特徴的なものであり、これに対して社会全体にもたらす効用への配慮という知的プロセスを必要とする功利主義的な判断は哲学者に固有のものだとして、両者を対比する説がこれまで提示されてきた。しかし、太田氏はスミスの記述を丁寧に追いながら、社会階層によって異なる判断原理を想定するこのような解釈を否定する。太田氏によれば、スミスにとって4つの判断原理は各人が属する社会階層とは関わりなく、すべての人間に見いだせるものであり、共感原理に基づく判断と効用に基づく判断も当然、同一人物の中に併存しうるものである。

第三は、共感に基づく判断は効用に基づく功利主義的な判断によってその正当性を確認されてきたとしてきた従来のスミス理解を批判した点である。このような解釈はスミスの道徳哲学における功利主義的な要素を過度に強調する傾向を持つ。これに対して太田氏は、四つの判断原理が併存する中で、中心的な位置を占め、強い影響力をもち、スミスの表現では「最も自然的」であるのは、あくまで共感原理であるとする点で、これまでのスミス像に修正を迫っている。

一方、残された課題がないわけではない。

第一に四つの判断原理の関係についてはより丁寧な説明が求められるだろう。効用に基づく判断や慣習に基づく判断を独立した判断原理とみなすことについては異論もあり、また共感と効用それぞれに基づく判断の一致・不一致についても反省や時間といった要因だけでは説明しきれない問題が残されている。さらに、共感的原理が「最も自然」という場合、「自然」が意味する内容についてもさらに詳しい説明が欲しかった。スミスの入り組んだ議論を解きほぐすことは容易ではないが、より詳細な説明、予想される反論に対する事前の応答が望まれる。

第二に経験と観察という方法論は当時の多くの思想家たちによって共有されていたものであり、また、過度な単純化への危険に言及したのもスミスだけではない。そうであれば、スミスの特徴はこうした方法をスローガンや指針に終わらせずに徹底した点にあるのか、その徹底ぶりは同時代の

思想家たちと比べて際立ったものだったのかを論じることで、スミスの思想史上の位置付けはより明確になったであろう。本論はこの問題についてハチスンとヒュームには言及しているものの、十分な議論を展開しているとは思えない。

第三に本論の独自性は十分に認められるものの、その説明がやや簡潔にすぎるきらいがある。研究史を追いながら、従来の研究に欠けている視点を説明するに際して、本論がその欠落に注目する意義、その欠落を埋めることがもつ重要性についてより積極的な議論を提示すべきだったろう。

もちろん、こうした問題は本論文の高い水準を損なうものではなく、著者もまたこうした課題は十分に自覚しており、今後の研究によって克服されることを期待したい。

3 最終試験の結果の要旨

2022年1月24日、学位請求論文提出者、太田浩之氏の論文についての最終試験を行なった。本試験において、審査委員が、提出論文「アダム・スミスの経験論的道德理論—「人間本性の抽象科学」と道德判断の諸原理—」に関する疑問点について逐一説明を求めたのに対し、氏はいずれも十分な説明を与えた。

よって、審査委員一同は、太田浩之氏が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（社会学）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。